

## 《研究ノート》

## 大都市零細工業の地位と性格

板 倉 勝 高

## I 問題の所在

わが国の工業生産は、第1次大戦前後から現在まで、主として東京・大阪を中心とする2大都市域を軸に発展してきたといっても過言ではない。そしてこの両都市域<sup>1)</sup>の付加価値生産額の対全国シェアは、戦後の高度成長期を通じて、わずかずつ上昇し、昭和28年には46.3%であったものが、昭和44年には50.7%と全国の半分以上に達している。

この両都市域への過大な工業集積は、すでに昭和30年代から問題視されており、工業配置の政策としては、新産都市・工業整備特別地域を中心とした全国総合開発計画も、下北半島や志布志湾の大規模開発をふくむ新全国総合開発計画も、いちおう大都市域からの工業分散を柱としたものであった。しかしこれらの政策は、大都市域に集まる工業集団のもつメカニズムに対する認識も研究もまったくおろそかであったため、一向にその実効があらわれなかつことは周知の事実である。

この2大都市域の工業は、私たちのみたところでは<sup>2)</sup>、鉄鋼・石油精製のようないわゆる臨海工業というべき素材的重化学工業のしめる比率は意外に低く、耐久消費財生産が主がある組立機械工業と、日用消費財生産が主である軽工業の2つが柱になっている。いずれにしても大都市工業は、消費財工業を中心としたものなのである。たとえば両都市域における化学工業の大部分は、医薬品・化粧品・石けん・洗剤などで、ながく東京で最大の付加価値生産額をあげていた工場は、資生堂の工場であった。このようなものはまったく雑貨的な日用消費財であって、一国の産業高度化の指標としての重化学工業というイメージからは遠いも

のであるといわなければならない。

この組立機械工業と軽工業は、いくつもの産業集団によって成り立っているが、そのひとつひとつの産業は、多層におよぶ下請生産構造のピラミッドを構成していることも、よく知られた事実である。これらの下部構造の中心は、東京大都市域（以下京浜とよぶ）においては明らかに2つある。組立機械工業では城南<sup>3)</sup>で、軽工業では域東<sup>4)</sup>である。大阪大都市域（以下阪神とよぶ）では大阪・京都・神戸はそれぞれ別のグループを構成しているが<sup>5)</sup>、その中で大阪市についてみれば、東<sup>6)</sup>・西<sup>7)</sup>・北<sup>8)</sup>の3つの核心地域をみとめることができる。そしてこれらの下部構造のピラミッドは、底辺になればなるほど零細な規模となり、したがってこれらの両地域が零細工場の大集団であることも明白である。

いま京浜の中心である東京と、阪神の中心である大阪におけるこの種零細工場の重要性を、第1表によって数字の上で一瞥してみよう。第1表では、1人～29人を零細工場、30人～299人を中小工場、300人以上を大工場と分類した。零細工場を29人以下とするか、19人

第1表 東京・大阪零細工場の地位

	全 国		東 京		大 阪	
	事業所	従業者	事業所	従業者	事業所	従業者
零 細 工 場 1 人～29 人	90.9%	33.3%	91.0%	39.0%	83.0%	37.6%
中 小 工 場 30 人～299 人	8.5%	35.7%	8.5%	37.0%	9.3%	38.6%
大 工 場 300 人 以 上	0.6%	31.0%	0.5%	24.1%	0.6%	23.9%

昭和44年度『事業所統計調査報告』第1巻「全国篇」、第3巻「都市篇」による。

1) 経済企画庁による13地域区分のうち、関東臨海（埼玉、千葉、東京、神奈川）、関西臨海（大阪、兵庫、和歌山）をもって仮に2大都市域としておく。これでは京都が疎外されるので問題がある。

2) 板倉・井出・竹内・北村「京浜工業地帯の地域構造」『地理学評論』Vol. 37—8, 1964.

3) 品川区・大田区・川崎内陸。

4) 台東区・墨田区・江東区各区。

5) 板倉・井出・竹内・高橋「阪神の工業」『人文地理』Vol. 20—1, 1968, p. 29.

6) 城東・生野・東成各区。

7) 港・大正・西成各区。

8) 東淀川区・西淀川区。尼崎市南部。

以下とするかについては議論の余地があるが、この表のベースにした事業所統計では、19人レベルの区分をとることができなかったで、しばらくこの区分にしておく。

事業所数では零細工場の比率が高いのは当然であるから、従業者数でみると、東京、大阪ともに全国水準に比べて大工場の比率が低く、零細層の比率が高い。そして中小工場の場合よりも、零細工場の場合のほうがその差が大きく、東京においては大・中小・零細の3区分で零細工場が主位に立っている。名古屋の場合は、これと異なり従業者の数で零細35.1%、中小29.7%、大35.2%で、大工場の比率が全国水準よりはるかに高く、零細工場もやや高く、中小がとりわけ低い。その点2大都市域とは様相を異にする。

ところが事業所統計のもっている看板主義<sup>9)</sup>という条件を考え合わせると、10人以下の零細工場の場合、統計が示している数よりも相当大きな数がかくされていると思わなければならない。このような統計の不備を念頭におくと、零細工場の比率は、ますます重要性を増してくる。

つぎに、これら消費財産業は、東京においてはいずれも分布上の特色をもっていることが知られている<sup>10)</sup>。また、大阪についても同様の特色を見出すことができる<sup>11)</sup>。すなわちある種のものは区内全域に分散し、ある種のものはひとつかふたつの集中地域をもっている。それぞれの産業が膨大な零細工場群を組織して、地域的生産集団を構成しており、しかもその末端は統計調査ではとらえられていない。このような集団に対するアプローチは東京をひとまとめでした議論では充分ではなく、産業ごとの実態調査にもとづく分析を重ねることが不可欠な条件となっている。

このような立場から、個別的に産業ごとに零細工業集団を研究していくと、明らかに東京や大阪の産業が、零細工業集団を軸として回転していることがわかるであろう。すなわち、大都市零細工業の研究は、日本資本主義の研究という面からも、その主導力たる大都市

工業の実体を明らかにする必要がある。また、この研究は大都市研究の立場からは、大都市の地域経済問題としてのみならず、その Physical な構成要素を認識する上に通らねばならない必要条件である。この種の研究を前提としないあらゆる大都市計画、大都市改造論は、砂上の楼閣にすぎないことを警告しないわけにはいかない。

本稿は、この視点に立って東京・大阪を主とした大都市工業の構造を、地域的生産集団という立場から、零細工業に重点をおきつつ、明らかにしていこうとする一連の研究の序説にあたるものである。以下、在来零細工業を主としてあつかってきた中小企業論における研究の問題点をしらべ、つぎに大都市零細工業の特性を考えて、以下につづける研究の前提としたい。

## II 中小工業研究の問題点

このような大都市の零細工業は、従来どの分野であつかわれてきたであろうか。日本経済における大企業対中小企業という二重構造は、あまねく知られた事柄であり、この考え方に立つと、零細工業は当然中小企業論であつかわれることになる。この日本の中小企業論というものは、文字通り汗牛充棟もただならぬものがあり、それらの著作目録だけでも大部の本になるくらいである。微力をもってこれを全部閲読批評することは不可能であるし、これをいくつかのタイプに分類するにも忸怩たる思いを禁ずることができない。

ところが私は、これら沢山の研究の一端にふれていく間に、いくつかの不思議さを感じざるを得なかった。いまそれを3つばかりまとめて、大方の御教示を得たいと思う。

その1は、零細工業をふくむ中小企業研究の中で、大都市中小・零細工業の占める比率は前述のようにすこぶる高く、あきらかに全日本の中小企業論の中枢におかれなければならないのに、この研究・論述がほとんどみられないことである。とりわけ東京のものについては皆無に近い。

その2は、大企業対中小企業というとらえ方で、とくに排斥したとは考えられないが、零細工業とくに大都市の零細工業の分野の研究が少ないことである。

その3は、これらの中小（零細をふくむ）工業集団は、明白な地域集団を形成しているのが特色である。それなのにこれらを地域集団として論述したものがないことはないがいたって少なく、当然地域的産業集団としての機能やメカニズムについても無関心である。

9) 「昭和44年事業所統計調査のねらいと期待」『統計』Vol. 22—5, 1969, p. 19.

看板、表札のでている所だけを調査対象とすること、したがって“しもたや”で縫製加工をしているようなものは、大都市では統計の対象とはならない。ところが地方で織物工場や陶器工場が多い場合は、かくす事ができないので、ほとんど全数とりあげられてしまう。それゆえ統計の精度も各府県まちまちなのである。

10) 板倉・井出・竹内『東京の地場産業』大明堂、297頁、1970.

11) 前掲書「阪神の工業」.

実はこの3点の他に、中小企業論といいながら大部分が工業についての研究で、商業についての研究が少ないのはなぜだろうか。また経営という点からは、農業も零細企業であるのに、それは農業経済学の分野であると考えられて、工・商と同一レベルの企業論としてはとりあげられていないのはなぜだろうか。酪農家と乳業会社の関係などは、組立機械工業と部品下請会社、または原系メーカーと無数の機屋との関係と同じ次元でとらえたほうが合理的に説明できるのではないかと、などという疑問も残るが、私もまた主として工業地理の研究に従事してきた者であるから、これらの点はしばらくおき、前3者の工業についての疑問をのべるだけにとどめたい。

### 1. 大都市中小工業研究の不足

じつは中小企業ばかりでなく、大工場をふくめた大都市工業の研究も数えるばかりであっても川崎市<sup>12)</sup>や神奈川県を対象としたものしかなく、東京大都市域全域を対象としたものはほとんどないといってよい。全国の中小工業を網羅的にとりあげたと思われる大内兵衛監修『地域と産業』<sup>13)</sup>において、大都市の産業（この場合は中小工業）に、どのくらいのウエイトが与えられているかをみよう。

この本では第1部で高度成長下における地域開発問題をあつかい、第2部で高度成長下における地場産業問題として、会津の漆器や、今治のタオルなど25業種をあげているが、この中で東京に属するものは金属玩具とメリヤスの2業種のみで、大阪府に属するものは、線材二次製品・ミシン・毛布・輸出敷物・魔法びん・人造真珠の6業種である。しかしこの中で線材二次製品は枚岡、毛布は泉大津、輸出敷物は堺、人造真珠は和泉の産物であり、大阪府の産業ではあっても、大阪の町の産業ではない。これらはいずれかというところと農村の産物で、<sup>メトロポリス</sup>少なくとも大都市大阪の産物ではない。つまりこの中で大都市大阪の産物は、ミシンと魔法びんの2業種だけである。

それゆえ25業種の中で、東京・大阪合わせて4業種だけがとりあげられているわけで、これでは全国生産高の約半分を占める2大都市域の中核的産業としては、いかにも公平を失ったあつかいといわざるを得まい。もしこれがまったく大都市の産業を入れないならば、

またそれはひとつの見識であるかもしれないが、4つだけ入れているので、大都市産業軽視の実態がよく理解される。

つぎに、全国の中小企業についての記述がすぐれているものは、中小企業調査会が刊行した第1次から第3次にわたる10冊におよぶ中小企業研究のシリーズ<sup>14)</sup>で、この種の研究では白眉というべき大作である。この中にとりあげられている工業は、川口の鋳物、播州・泉南の綿織物、北陸・桐生の人絹織物など全部で44タイトルを数える。その中で東京のものは『中小工業における技術進歩の実態』（第1次第5巻）に入れられた通信機器工業だけであつた。大阪の市街地に属するものは、銅合金・家具・雑菓子・工作機械・機械などがそれぞれの項目の中に記載されているが、工作機械・機械などでは、大阪という場所的な指摘はいたって弱い。その他のものも地域的産業集団としては認識されていない。要するに、この大シリーズの中で、大都市工業に与えられた地位は、この程度にすぎないのである。

また少し古いけれども、昭和32年に出た『輸出中小工業の実態調査』<sup>15)</sup>は、上記『地域と産業』の底本というべきものであるが、この中ではとりあげられた29業種のうち、東京は金属玩具だけで、大阪市街地は布帛製品・魔法びん・ミシン・ほうろう鉄器・アルミ製品・加熱鋏螺・セルロイド製品・万年筆・造花・洋傘があげられている。しかしこの本では大阪市内における地域集団としての理解はほとんどなく、とりあげ方もとくに理論的でなく任意に選ばれたようである。これら大阪に属するものの研究は、大阪府立商工経済研究所のスタッフによって行なわれたもので、これらの調査の成果は、のちに『地域と産業』に昇華され、さらに大著『大阪の中小企業』<sup>16)</sup>として開花した。これはおそらく大都市中小工業を正面からとりあげた唯一の労作であろう。

ところがこれを見ると第1部は全体の構造をのべ、第2部で工業については機械金属・繊維・雑貨の3大部門に分け、合計32品目の調査を収録している。しかしこの中で明らかに大部分が市内にあるものは、鋳

14) 押川・中山・有沢・磯部編『中小企業研究』Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ『中小企業の発達』など10冊、東洋経済新報社、1960～65。

15) 中小企業庁：地方調査機関全国協議会共編『輸出中小工業の実態調査』東洋経済新報社、942頁、1957。

16) 大阪府立商工経済研究所『大阪の中小企業』新評論社 646頁、1970。

12) 神奈川県立川崎図書館『京浜産業史講座』第1～3集、1961～63、115頁、140頁、126頁。

13) 大内兵衛監修：地方調査機関全国協議会編『地域と産業』新評論社、1969、592頁。

物・電気めっきなど10品目、明記はされていないがおそらく市内が主とみられるもの、プラスチック成型など5品目であるのに、市外にあるものは14品目、おそらく市外にあると思われるものに中小紡の1品目がある。このほか判定不明のものに合板、よく場所のわからぬものに清料飲料と事務用紙製品がある。なお丸編メリヤスは編立は市外、縫製加工は市内という地域的分業が記されているので、それぞれに数えたから、合計は1品目ふえることになる。

つまり『大阪の中小企業』であつかわれているものは、大都市大阪の中小工業ではなく、広く農村地域をふくんだ大阪府にある中小企業という意味だから、大都市製品と、周辺農村地帯および周辺中小都市の製品がほぼ半半ということになって、大都市の工業という点からは多少焦点が甘くなったのはやむをえない。しかも全体として大都市の工業か、周辺の工業かという場所的関心が比較的うすい。また大阪市、ないし各区の工場数も、全体一丸としてとらえられているために、市内・区内のどこにあるのか分からない。その結果、市内の工業については地域的産業集団としての認識が弱くなった。これは分布図を作製しなかったためにおこった盲点で、もし正確な分布図を描いたならば、これらの工業が地域集団として問題になるのだということが、一見して理解されたであろう。せめてメッシュ法による立地行列<sup>17)</sup>でも作ればよかったと思う。

以上4種の例をあげて、大都市中小工業の研究が乏しいことを説明してきた。実はこの4種ばかりでなく、文献目録などによっても、大都市工業についての研究が手薄なことは疑う余地はないであろう。

## 2. 零細工業研究の不足

この点については現在までの中小企業研究者が、とくに零細工業を軽視したり、その研究を無用であると述べたというわけではない。また地方工業については、ある程度の研究蓄積があるといわなければならないが、大都市についてはほとんど存在しないことと、零細工業という概念が、中小企業の一部としてしか考えられていなかったことが問題なのである。いってみれば、中小企業と零細企業を区別しなければならないという意識がまるでなかったから、したがって零細工業の研究がおろそかになったのだと解することができる。藤田敬三<sup>18)</sup>は「下請工業の面においても、その末端にこの種零細工業者が一連の再下請として癒着している以

上、決してこれを軽視することはできない」と記している。ここに明らかに大都市機械工業の下請部門の零細工業がみつめられているけれども、その研究は事実上軽視されてしまったのである。

地方零細工業集団の古典的な名著として、磯部喜一の『日本漆器工業論』<sup>19)</sup>をあげることは問題はあるまい。私はこの本が東京と京都の漆器工業の記載が乏しいのを惜しむものであるが、それにさておき、磯部にしても、そのほか桐生、丹後などの各地の織物産地について発表された沢山の業績も、たしかに零細工業集団として問題にされたものであった。しかし、このような産地の商業資本である問屋を媒介として結集された零細工業集団と、藤田がいうような機械工業集団の下部機構で主として大都市にある下請零細(中小)工業集団とは、本来同じものではない。これを別に考えたほうがよいのではないかという問題を提示したのは、小宮山琢二<sup>20)</sup>の下請工業における新問屋制という概念であった。ところがこれについては、「元方が商業資本である場合には下請制工業はなり立たないか」<sup>21)</sup>というような問題として議論されてきた。しかしむしろ、ここで考えられた下請制というものは大企業が中小企業に対して発注するものであり、中小企業はまたその工程を零細企業に発注するのだということが指摘されなければならない。つまり大企業から直接受注できる力のある中小企業というグループと、そうはできない弱小零細のグループとがある。力のある中小企業は大企業に対しては下請だが、零細企業に対しては元方として働くという二面的性格をもっている。ところが零細企業のほうは、独立して商品を販売することもできなければ、内職にでも持ち込む以外には、再下請ということはできない。この点では大部分の日用消費財の下部構造も、耐久消費財の下部構造も、零細工業としては共通性がある。

ついでに地方零細工業集団を組織している問屋の問題について一言しておきたい。実はこの種の問屋、あるいは問屋の性格を合わせもつ工場は大都市にも多い。これは日用消費財の生産にみられるパターンで、製造問屋である。その社会的な役割は、このような零細工業群を組織して、さまざまな製品を企画・仕わけをし

18) 藤田敬三『日本産業構造と中小企業』岩波書店、432頁、1965、p. 19.

19) 磯部喜一『日本漆器工業論』有斐閣、280頁、1945.

20) 小宮山琢二『日本中小工業研究』中央公論社、225頁、1941.

21) 稲葉襄『中小工業の経済理論』森山書店、240頁、1970.

17) 前掲書「阪神の工業」.

て零細企業に分割製造させ、できたものを集散地の卸問屋に売り渡す。自らはあまり付加価値を造成することをしない点が商人資本としての機能だとみられる理由であるが、同じ商人資本といっても集散地の卸問屋、消費地の2次問屋とはその働きがちがう。消費地の2次問屋も卸問屋の一種であるが、生産問屋と卸問屋では、まったく利害がちがい、したがって対応もちがう。在来の地方零細企業集団の研究では、この製造問屋と卸問屋を商人資本という名前で一括したために、元方という製造問屋固有の機能と、商人資本一般の機能とが混同して理解された恨みがある。そして元方機能は組立機械工業なら大企業でも中小企業でも持ちうるし、製造問屋もまた持っている。この点では稲葉の見解は正しい。しかし稲葉は製造問屋と卸問屋が違う物であることを認識していなかった。

このような零細企業に積極的な評価を与えたのは清成忠男で、「通念は零細下請企業の増加に否定的な評価を与えている。……だが、労働力不足・高賃金経済のなかで、生産性の高い零細企業がふえるというのが、最近における零細企業増加の主流である」としている<sup>22)</sup>。清成の理論はマーシャルの発想にもとづいた零細企業の多産多死現象、つまり、新規参入—発展—倒産のサイクルを考えたものである。これからベンチャー・ビジネスへの評価などが生まれてくるので、在来の中小企業論に比べてダイナミックで説得力がある。しかし考えてみると、これは零細企業でもやりようによっては中小企業、やがては大企業にもなりうるという発展可能性論であり、零細企業自体を独自の論理にしたがって行動するグループとしてとらえ、資本主義社会において零細企業の存在自体を合理的なものとしてとらえようという態度はみられない。この点は清成の路線にのっていると思われる『日本の小零細企業』<sup>23)</sup>でも、「本書の考察対象は、小零細企業であり、『中小企業』一般ではない。だが、もちろん、ここでいう小零細企業はいわゆる『中小企業』と対立する概念ではなく、『中小企業』の一部としての小零細企業である」と記していることでも明らかである。

またこれとは立場が異なるが、隅谷三喜男は「地域と産業」<sup>24)</sup>において、——大都市の中小零細産業をめ

ぐって——、というサブタイトルを付して零細工業の地位をのべているが、大都市の「中小・零細工業は……大都市のせまい地域に業種ごとに集積・特化して存在している」というすぐれた指摘をしているが、中小・零細の矛盾対立については、残念ながら明白にはのべられていない。

しかし前にのべたように、下請関係を媒介した大企業との対応関係において、中小企業と零細企業とは明らかに対応の態度がちがうし、利害も対立する。また曲りなりにも管理部門を持たなければなり立たない中小企業と、それを持たないでもすむ家族労働が重要な地位を占める零細企業とでは、利潤・労務などに対する考え方がまったく相違する。また製品の販売という面をとっても、多くの零細企業は自らの手では販売網を組織できない。しかし中小企業の場合はある程度可能である。私は零細企業は零細企業なりに独自の理論を持っているのだから、この両者は別なカテゴリーとしてとらえたほうがわかりやすいと考える。いってみれば、二重構造としてではなく三重構造として考えるべきだということである。實際上第1表によっても従業員数でみれば、全国では大・中小・零細がほぼ3分の1ずつであるのだから、中小・零細を一体として考えるほうが無理なのは当然であろう。

### 3. 地域的産業集団としての理解の不足

中小零細産業では、地方産地では一定地域に同一産業に関連する中小零細工場がたくさん集積し、場所的存在という意味でも、当然地域的集団であるのに、若干の例外をのぞいては<sup>25)</sup>、それが持っている地域的關係については深くは考えられていない。この点は『大阪の中小企業』においても同様で、大阪という行政地域に存在する集団という以上には地域的なまとまりというものに価値をおいていない。これらの研究はすぐれたものではあるが、それを地域集団たらしめている結合関係、地域内の他の需要素（必要ならば環境とよんでもよい）との結合関係と、それを貫く論理の解明は、期待するのが無理なのかもしれない。この点は隅谷の「地域と産業」がとりあげた事例においても、中小零細産業集団を分布図としてとりあげた点は、在来の市町村単位でとりあげてきた集積状況およびその結

22) 清成忠男『日本中小企業の構造変動』新評論社、337頁、1970。

23) 国民金融公庫調査部『日本の小零細企業』東洋経済新報社、237頁、1967、p. 1。清成はこの調査部の部長であった。

24) 隅谷三喜男「地域と産業」、大塚・小宮・岡野編『地域経済と交通』東京大学出版会、390頁、1971、p. 63～75。

合関係の説明よりも、実態に則していることは評価しなければならないが、これらの産業と同じ地域社会の他の集団、および他の環境構成要素と、互いにかかわりがあるのかないのかについてはふれられていない。したがって、これらの産業が構成員の一部をなしている大都市域に対しての理論に到達できなかったのは惜しむべき点である。

このような欠点は、じつは地域的把握を本旨とする地理学的研究においても同様で、戦前の段階からは三沢勝衛(注25)をはじめ、武見芳二(東京)、幸田清喜(北陸)、川崎敏(北関東)など、戦後では西村陸男・辻本芳郎・山口貞雄・風巻義孝・沢田清・竹内淳彦・井出策夫・太田勇らが『地理学評論』『人文地理』『経済地理学年報』などを発表機関として工業の地域集団を取りあげてきた。しかし地域集団としての結合関係や、環境との結合という点では風巻<sup>26)</sup>や太田<sup>27)</sup>に先駆的な努力をみとめなければならないが、必ずしも成功したとは思われず、大体において工業の地域的配置の問題にとどまっている。

しかしこの課題はまだ糸口についたばかりで、対象のとり方も方法論も確立はしていないから、現状でこれを取りあげるのはよほど勇気が必要とする。とくに大都市における中小零細工業は、隅谷も指摘しているように、通常地域集団を構成しており、これが統計もとらえかねているほどの膨大な零細工業集団によって構成されている。このような条件で地域集団を問題にしながら大都市零細工業を研究するためには、基本的な数字が不確定なのだから、計量的な方法などでは、

究明の方法はないであろう。これには迂遠であっても実態調査にもとづく分析を重ねなければならないことは当然である。

### Ⅲ 大都市零細工業の特性の認識

東京・大阪においては零細工業のウエイトが高いことはすでにのべた。ここでは大都市零細工業の特性を認識するための方法を検討しておきたい。

まず東京と大阪において全国的に優位を占める生産品目を考え、それらの零細企業の比率を調べて、大都市零細工業集団を検出し、それが地域集団として存在していることの意義を考え、それらが地方の零細工業集団とどのような本質的な相違があるかを見出さなければならない。本節では若干の例をとりあげて、大都市の零細産業集団検出の方法を考え、つぎに地域的産業集団捕捉の方法を論じ、最後に大都市工業集団と、地方工業集団との本質的相違について見通しをたて、これをもって大都市零細工業分析の方法にまで導きたいと思う。

#### 1. 大都市零細産業集団の検出

いま東京都の品目別出荷額が全国第1位を示すものをあげると昭和43年で実に477品目ある<sup>28)</sup>。その中で繊維工業を例として産業集団の所在を考えてみたい。東京では繊維工業は比較的少ないからわかりやすいと思ったからである。比較的少ないといっても綿よこ編メリヤス外衣、毛よこ編メリヤス外衣、その他の繊維(合繊)よこ編メリヤス外衣など、11品目が全国首位である。ところがよこ編メリヤス外衣という点では、原料が綿であれ毛であれ合繊であれ、よこ編の外衣であることには変わりなく、これら業者もある時は毛で、ある時はアクリル繊維で、よこ編外衣をつくる。そしてよこ編の下着というのは、昔の腹巻きぐらいだから、大部分は外衣製造である。つまり、よこ編メリヤス産業というのは一つの産業集団で、産業分類を品目までおろすと細かすぎて、このように産業集団の単位とは一致しないのが普通である。

しかし、小分類では、逆にいくつかの産業集団がひとつの分類に混在してしまっていて、産業としての捕捉がむずかしい。この場合は、メリヤス業で、たて編、よこ編、丸編、靴下、手袋という5業種が入ってしまう。それでは細分類ということになるが、それでも後のべるように、不具合な点があつて、似たような2~3

25) なぜか分らないが、諏訪盆地についてはこの種の研究が多い。

三沢勝衛「諏訪製糸業発達の地理的意義」、『地理学評論』Vol. 2, 1926, p. 813-34. この論文は『平野村誌』の底本である。

村田喜代治編『地域開発における新産業都市——松本諏訪地区の研究——』東洋経済新報社, 580頁, 1969.

内藤勝「地域構造の変化からみた分析」, 押川・中山・有沢・磯部編『第2次中小企業研究Ⅱ・経済発展と中小企業』所収, 433頁, 1962. 東洋経済新報社, p. 242-292.

このほか、前記注14)のうち『地域経済と中小企業集団の構造』1960, 452頁は大阪の市外工業集団についてのべ、同じシリーズで『高度成長過程における中小企業の構造変化』1962, 566頁では豊田・高槻・群馬の実態についてのべている。

26) 風巻義孝「電気化学工業の立地」、『経済地理学年報』No. 1, 1954

27) 太田・高橋・山本「日本の工業化段階と工業都市形成上・下」『経済地理学年報』Vol. 16, No. 1~2, 1970.

28) 前掲書『東京の地場産業』p. 4-7.

の集団が一細分類の中に混在してしまう。そこでいちおう細分類を使うことにして、まず品目で重要度の目安をつけておき、東京・大阪が1・2位を占めるような大都市性の品目が主力である細分類の項目のいくつかについて、規模別構成をみてみよう。細分類ならば工業統計表で全国規模での規模別記載があるから、全国の過半が2大都市域にあるものならば、これで大勢を判じてもさしつかえあるまい。

第2表ではまず上記のよこ編メリヤスをあげ、婦人既製服、電気メッキ、玩具をとりあげた。いずれも私たちが研究<sup>29)</sup>したことがあるもので、東京・大阪への集中が大きく、かつ地域的凝集の大きなものであった。ところがこの中では、よこ編メリヤスと婦人既製服は、生産・流通を通じてひとつの産業集団であるが、玩具は金属製、布帛製、ゴム製と主たる原料によって産業集団が分かれている。また電気めっきは、分布上で城東と城南の2つの別な集団がみとめられ、城東の集団は玩具や優勝カップなど雑貨の、城南の集団は電気機器や自動車などの、下部構造をなしており、独立した産業集団であるかどうか疑わしいが、いちおう地域集団をなしている。つまり零細工業集団の解明には、産業分類による区分によりながらも、それにはとらわれず、困難ではあっても実際に機能している産業集団ごとにとりあげるほうが望ましいわけである。

さて、この4業種とも29人以下の零細階層で50%以上を占め、零細工業従業者の比率が大きい。しかもこれは事業所統計の区分とは異なり、a, b, c, dまではほぼ10人刻みになっているが、それで見るとcだけが前後より低く、谷間になってこの階層を境に質的な不連続があることを物語っている。つまり29人以下をひとつのグループにしたことは正しかったと考えら

第2表 産業細分類による規模別構成(全国) 百分比

	よこ編 メリヤス	婦人既 製服	電 気 めっき	玩 具
a. 9 人 以 下	29.4	26.1	20.8	27.5
b. 10 ～ 19 人	17.5	21.6	27.1	20.4
c. 20 ～ 29 人	8.9	8.6	14.5	8.8
零 細 計	55.8	56.3	62.4	56.7
d. 30 ～ 49 人	13.0	11.4	15.2	11.6
e. 50 ～ 99 人	17.3	16.0	14.9	13.2
f. 100 ～ 199人	9.4	9.7	5.7	×
g. 200 ～ 299人	1.9	×	1.7	×
h. 300 ～ 499人	2.7	2.1	—	4.1

(昭和44年、工業統計表より)

29) 前掲書『東京の地場産業』ほか。

れる。しかも9人以下の実数はこの数字よりはるかに多いと思わなければならない。

この4業種の例によって大都市に生産比率の高い業種の各産業集団は、零細層が卓越していることはみとめられよう。そしてこれらについては実地に検証してみなければならないが、いちおう東京・大阪においては注5)、注10)によって地域集団を形成しているものが多いと考えられる。

## 2. 地域的機能集団

これらの産業集団は、単に工場の集団として存在するというだけで、地域的産業集団なのであるか。いままでの多くの研究が、工業の地域配置の特性としての地域集団を検出するのにとどまって、その地域内部の結合の意義についての研究に及ばなかったのは残念であった。もしそのような意識があったとしても、ただか下請結合の範囲にとどまっていたのである。

ところが私たちは『東京の地場産業』を刊行したとき、思うところがあって、各産業の工場(工作の場所)の分布図を、同じスケールで作製した。ただし、これを直接に重ね合わせて、産業集積地域を表示することをしなかったのは、工場といってもいろいろな性格があって、丸編メリヤスの工場とばねの工場は、たとえ同じ30人規模のものであっても、社会的・地域的に持っている意味はまったくちがうことを知ったからである。しかしこれによってほぼ問題地域を設定することはできる。その問題地域のひとつは大田区梹谷であろう。そこには鍛造・铸造・熱処理・めっき・ばね・歯車・機械加工などの各種の工場が存在する。これらの工場は一見無秩序に集積しているように見える。しかしこれらは同業種の工場でも、大小・長短・硬軟によってそれぞれの得意品目を持ち、専門化している。得意品目というのは、いいかえれば特別な機能であり能力である。

これらは皆元方工場からの下請工場なのである。いずれも技術が売り物で、元方工場ではその部品を自製するより、梹谷の専門工場に発注したほうが安くつくので、地域内外の元方工場はこれらの工場に直接発注する。梹谷内部で互いに取引をするという事は少なく、この地区の各工場は、元方工場を媒介として結合している。つまり組立機械工業全体としてみると、梹谷地域の極度に専門化した下請グループと各元方工場とは、機械製造機能として一体なのである。これは単に同一地域に工場が集団をなしているというだけではなく、



これが大きな産業技術・機能集団であることが知られよう。

大都市工業とくに零細工業の研究にあたっては、このように地域的産業集団を複合した機能集団としてとらえることが重要である。

### 3. 地方集団との対比

大都市産業の本質を考えると、地方産地との対比は、欠かしてはならない方法の一つである。現在日本の各地には機械組立工業と日用消費財の地方産地があって、地方工業化の主軸となっている。しかし前者にあっては成立後数世代を経た諏訪盆地や浜松のように、中小零細工場群を構成している場合もあるが、一般的にはK・D工場<sup>30)</sup>であるために、零細工場では有利性が少ない。

後者にあっては、大部分零細規模の生産集団を結集して産地集団を形成し、それゆえに産地企業などよばれるようになっている。これらの地方産地集団は、必ずしもいってもよいほど同じ品種のものを大都市において生産しており、これと競合・補完の関係を持っている。そしてその存在形態は、単に大都市ではコンパクトに密集していたものが、地方では稀釈された状態で存在するというのではない。そこには生産の質的相違と、地域的生産体系のシステムの相違がみられるはずである。

生産の質的相違は一般的には大都市において名品種・小量・高級・高価のものを産し、地方においては単種・量産・普及品・安価のものを産するという原則がみとめられる<sup>31)</sup>。したがって労働力としては、大都市では高度熟練の男子労働力が主軸となり、これをおぎなう形で、不熟練労働者、単純労働力としての女子労働力が存在する。地方においては男女とも低賃金労働力の集約が原則的な型である。この原則が高度成長の波にもまれ、後進国の追上げにさらされながら、ど

のように変質しつつあるかをさぐらなければならない。

地域的生産体系のシステムの相違は、原理的には大都市における多数の産業の重合による多角的機能の發揮と、地方における比較的単一品種で量産メリットに依存する機能とが対比されよう。この大都市の多角的機能というものが、新製品の開発と、ファッション的要素の具現を可能にしていると考えられる。このような対比によって、大都市零細工業の特質が、どの程度浮き彫りにできるかということは、つぎの問題となるであろう。

### まとめ（大都市零細工業分析の方法）

以上によって大都市における零細工業分析の方法は、原則的に産業分類の単位によってではなく、生産・流通を一貫した産業集団としてとらえられなければならない。また捕捉の方法としては、行政単位の集計によらず、地域集団としてとらえなければならないし、それは分布図を作ることによって可能であると思われる。そしてアプローチの態度としては、地域論的な考え方を導入して、これら産業集団の形成、分布、生産、流通の体系を支柱とし、さらに地区の他の構成要素との関連分析に進まねばならない。

そうすると、いちばん問題となるのは、大都市の零細産業が幾業種も重合している地域であろう。それは私が Complex-Area とよんだところであるが<sup>32)</sup>、このような地域の存在こそが、大都市の零細工業集団を地方のそれと異ならしめ、独特の地域的産業集団の論理を具現しているところだと思う。つまりこの地域に存在するひとつひとつの産業集団に働く論理と、地方の零細工業地域に働く論理との対比によって異同を明らかにすれば、共通の部分が零細工業一般の原理であり、異なる部分が大都市・地方産地の特性を示す原理となるであろう。そのためには、東京・大阪にある各零細産業集団の実証研究に進まねばならない。

30) 板倉勝高「関東地方の工業地域区分」、『東北地理』、Vol. 13の1, 1911.

たとえば、東京にある組立工場が米沢に工場を新設したとき、毎日1日分の作業に必要な部品を東京で集めてトラックに積み、米沢に送る。その返り荷に組立製品を積んで帰る。米沢は単に低賃金労働力を供給する場所にすぎない。輸出の時のノック・ダウンに似ているので、K・D工場と呼んだ。労働集約型工場だから、零細規模ではつまらない。

31) 板倉勝高『都市の工業と村落の工業』大明堂、219頁、1972、p. 9-12.

32) 板倉勝高「東京日用消費財工業の生産体系と地域配置」『流通経済論集』Vol. 4, No. 2, 1969. 31)に所収。